

東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol.60, Mar. 2018

第16回ホームカミングデー

(2017年10月21日)
創立140周年にあたり
安田講堂に出展しました

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

資料でみる
東京大学140年の歴史



安田講堂 4F回廊
10:00 ~ 15:00

当日の掲示



柏キャンパス一般公開2017

“知の蔵、文書館／BUNSHOKANです！”
(2017年10月27～28日)

加藤弘之総理へ宛てた学生(坪井九馬三)の
手紙などを展示しました

Contents

- 2 東京大学文書館大学史部門の活動
—「遺産」から「創造の源」へ—
秋山 淳子
- 4 東京大学文書館デジタル・アーカイブ
の本公開に向けて
宮本 隆史
- 5 業務日誌(抄)
(2017年8月～2018年1月)
- 6 文書館トピックス
ホームカミングデーへの参加：
創立から140年を振り返る展示
森本 祥子

東京大学文書館デジタル・アーカイブ(ベータ版)



東京大学文書館は、東京大学より歴史文化の発信と継承を担う機関として活動し、教育文化の発展に貢献することを目的として、本学関係機関と連携して「知の蔵、文書館／BUNSHOKAN」を創設しました。東京大学文書館のデジタル・アーカイブは、東京大学文書館のデジタル・アーカイブの公開を目的として、本学関係機関と連携して「知の蔵、文書館／BUNSHOKAN」を創設しました。このサイトは、東京大学文書館のデジタル・アーカイブの公開を目的として、本学関係機関と連携して「知の蔵、文書館／BUNSHOKAN」を創設しました。このサイトは、東京大学文書館のデジタル・アーカイブの公開を目的として、本学関係機関と連携して「知の蔵、文書館／BUNSHOKAN」を創設しました。

新デジタル・アーカイブの試験公開が
当館ウェブサイトにて始まりました。
現在、本公開に向けて準備中です。

東京大学文書館大学史部門の活動 — 「遺産」から「創造の源」へ —

東京大学文書館特任助教 秋山 淳子

今年度、東京大学は創設 140 周年をむかえた。これを記念する講演会開催や『東京大学の 140 年』が刊行され、大学のあゆみをふりかえる機会となったのではないだろうか。さてその 40 年前、大きな節目となった 100 周年記念事業の話から、東京大学文書館の大学史部門の機能と活動について紹介していきたい。

1 東京大学創立百年記念事業と大学アーカイブズ

1877（明治 10）年の「東京大学」発足を起点に 100 年目となる 1977（昭和 52）年を迎えるにあたり、記念事業の議論は 1966 年から評議会で始められた。翌 67 年 2 月には準備委員会が設置され、活動を開始する。しかし 1 年ほどで大学紛争の影響から事業の中断を余儀なくされ、検討再開は 73 年の企画委員会設置まで待たねばならなかった。その後は従前の議論を踏まえつつ事業が具体化され、75 年 3 月に事業計画と予算概要が評議会で承認される。「創立百年記念事業」の概要は、①記念式典の挙行、②百年史の刊行、③記念建造物の建設、④学術研究奨励基金の設定となった。これをうけ総長を委員長とする東京大学創立百年記念事業委員会を中心に、百年史編集委員会など各事業部門の機構が整えられていく。また事業資金を卒業生等の関係者から募金収集する後援会も発足し、各事業の支援を行った。

そして 100 年前の創設日と同じ 1977 年 4 月 12 日、学士会館で記念式典が盛大に開催された。他の三事業は並行して進められたが、大事業の完了にはさらに 10 年程度の期間を要したのもあった。国際学会館として活用されている山上会館は、この記念建造物であるが、建設に際して予定地が江戸時代の加賀藩邸内であるため遺跡調査を行う必要があった。その結果、多くの貴重な考古学的成果をあげたことは有名だが、事業計画は大幅に延長され開館は 86 年 7 月となったのである。

さて、当館との関係で最も重要なのが『東京大学百年史』の刊行である。『百年史』は百年史編集委員会の下に 1975 年 4 月に百年史編集室が発足し、同時に各部局に部局史編集委員会が設けられて、資料の収集、執筆を開始した。そして 87 年まで足かけ 13 年にわたる編纂事業の成果として全 10 巻を刊行している。

こうした編集・刊行の動きの一方で、収集した資料の事業完了後を見すえた活用方法についても検討が行われていた。その嚆矢といえるのが 1978 年の「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」だ。この報告では、国内外の大学アーカイブズや図書館、博物館の

活動と相互の関係性を調査し、『東京帝国大学五十年史』編纂後に資料が散逸し『百年史』での活用が困難である現状をふまえ、東京大学内に大学文書館を設置して「資料に学術的価値を認め、それらの系統的収集・保存」にあたるよう提言している¹。こうした議論をうけ、1987 年の『百年史』刊行完了とともに、編集室に代わり収集資料を保存、整理し、公開する機関として東京大学史料室が設置された。

なお、この大学史史料室から、2014（平成 26）年の東京大学文書館開館への道のりは平坦ではなかった。公文書管理法への対応やデジタル化の推進といった、新たな課題に応える機能も備えた大学文書館への発展が求められたのである。これには法人文書部門とデジタルアーカイブ部門の新設・拡充によりハードルを越えていくのだが、紙幅の都合上、本誌掲載の各論考を参照していただきたい²。こうした経緯からは、東京大学文書館の淵源が創立百年記念事業にあり、実は文書館自体がその重要な成果のひとつだといえるのである。

2 大学史部門の位置づけと三部門連携

現在、大学史部門は法人文書部門・デジタルアーカイブ部門とともに、主要な業務の柱を形成している。主な活動は、前述の百年史編集室・大学史史料室の収集資料を母体として、現在も継続して大学のあゆみを跡づける貴重な資料を収集し、整理、公開することである。

こうした役割は法人文書部門と両輪の関係にある。法人文書部門では、公文書管理法に定められた「国立公文書館等」として、保存期間満了後にも利用する価値があると判断された法人文書「特定歴史公文書等」の移管をうけ、保存、整理、公開をする機能を果たしている。これに対し、大学史部門は同法が定める「歴史資料等保有施設」の指定を受け、法人文書以外の貴重な記録を寄贈・寄託により収集し、「歴史資料等」として保存、公開している。この法人文書部門と大学史部門の機能は、それぞれアーカイブズの異なる機能：「組織アーカイブズ In-House Archives」と「収集アーカイブズ Collecting Archives」と位置づけることができる。東京大学ではこの両者を法制上と部門制によって区別しつつ、活用における一体化を進めている。そして複合的な資料情報の活用には、もう一つのデジタルアーカイブ部門の役割が重要であり、三部門の連携が当館全体の機能を支える構造となっている。

3 「歴史資料等」の特徴

現在、大学史部門が管理する寄贈・寄託資料は、作成者もしくは寄贈元を同じくする資料群(フォンドとよぶ)を単位として、公開されているものだけで約100資料群となっている。これに整理中のものを加えれば200資料群程度になると予想されるが、現在の公開状況に即してその概要と特徴を紹介したい。

歴史資料等は資料の出所の性格によって、6つのカテゴリー(総長資料・教員資料・職員資料・学生資料・関係団体資料・その他)に区分されている。

教職員に関するものは基本的に個人が作成・蓄積した資料群であるため、日記や書簡、大学での教育や行政に関する文書、様々なノート・草稿類、書や文芸作品など、公私にわたる多様な記録が含まれている。しかし、そうした個人というフィルターを通して形成された資料群は、しばしば同じ事案に関して大学組織が作成・蓄積した文書に対し情報を補完するとともに、異なる視角を提供してくれる。つまり大学の各事業・教育の現場における実態や、議事録には採録されない議論の機微、当事者としての個人的な意見や感想などが垣間見えてくるのである。一例をあげれば、総長資料の「長興又郎関係資料」には長期にわたる詳細な日記が残されている。長興が総長を務めた1934～38(昭和9～13)年は、戦時体制強化のなかで「矢内原事件」など、国家による学問や大学への圧力が日増しに大きくなった時期だ。この頃の大学組織による文書(法人文書)は十分に残されてはならず、日記の記述は当時の学内状況を知りうる貴重な情報となっている。さらに長興が総長としてこの難局にどのような考えで臨んだのか、本人の言葉で記されており興味深い。

そして学生や関係団体を出所とするものは、また別の役割を果たす。様々な年代の卒業証書の形式からは各時代の大学の社会的位置づけが透けてみえ、個人の受講ノートは学知の変遷を示すとともに、学生の旺盛な知識欲やちょっとした個性までにじませる。これらの情報は大学組織や教職員のそれと対応しつつ、大学のいとなみを明確に相対化する手助けとなる。1960年代に展開した大学紛争を例にあげれば、総長や教員、そして学生の立場からの記録が残されており、これに大学側の法人文書を加えれば、異なる視点から立体的に検証することが可能だろう。さらに写真アルバムやモノ資料など、感覚的に理解できる情報も時として大いに雄弁である。

このように多様な背景をもつ資料群を文書館で収集、公開する意味は、時代や場を共有する異なる性格の情報を統合して、東京大学という存在をより鮮明に把握し、検証できるようにすることにある。いわば法人文書が大学組織としての経糸の役割ならば、大学史部門があつか

う歴史資料等は緯糸となり、大学の姿に鮮やかな彩りを与えるものといえるだろう。

4 未来への活用：「遺産」から「創造の源」へ

さいごに10年後の創設150周年を見すえた課題について論じて、小稿のむすびとしたい。これまで本学では10年ごとに記念事業を実施してきたが、2027年には大きな節目となる150周年がやってくる。創設50年、100年と大学史の編纂を行ってきた経緯を考慮すれば、次回も150年史が編まれる可能性は高く、すでに数年前から学内ワーキング・グループでの議論が重ねられている。

さて150年史を編纂する場合、これまでとは大きく異なり、大学文書館の資料が利用できる状況での編纂作業が可能となる。前述のように『五十年史』の反省のもと、『百年史』では事業完了後に受け皿となる機構を創設した。しかし今回は、文書館によって資料情報が管理され、編纂に際して適切な情報提供を受けることができるのである。文書館としても、この機会に資料情報を整理・拡充し、有効な学術インフラとしての存在感を示したいと考えている。そこで現在、『文部省往復』等の主要文書や大学紛争関係資料のデジタル化を進めるとともに、教員人事情報データベースや寄託資料である『東京大学新聞』記事索引など、編纂に有効な基本情報の整備を始めている。とくに大学史部門では、百年史編纂の基礎資料となったものの整理・公開を急ぐとともに、歴代総長のインタビューなど、今後の活用が期待される資料の収集も積極的に取り組んでいるところである。

大学史部門が担当する歴史資料等は百年史の「遺産」そのものである。しかし、将来にわたる収集と整備の積み重ねのなかで、これらは法人文書とも連携しつつ、成長しつづけることが必要だ。そしてこれらの情報が常に最大限活用できるよう整備していくのが、学術インフラとしての文書館の使命と考えている。単なる「遺産」の継承で終わらせず、豊かな「創造の源」として力を発揮するため、大学史部門の奮闘は続いている。

¹ 「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」研究グループ『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究・昭和56・57年度研究調査報告』、1983年。

² 吉見俊哉「大学史料室を大学文書館に」第47号、2011年、森本祥子「大学文書館を目指して－公文書管理法と大学アーカイブズ－」第51号、2013年、小根山美鈴「2度の『大学アーカイブズ』－ダイジェスト：東京大学文書館前史－」第54号、2015年。

(あきやま じゅんこ)

東京大学文書館デジタル・アーカイブの本公開に向けて

東京大学文書館特任助教 宮本 隆史

東京大学文書館では、2017年に新しいデジタル・アーカイブのベータ版を試験公開した (<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/da/>)。現在、その本公開に向けて開発を行なっている。ここでは、その経過を報告する。本公開に向けて検討したことは、1. 目録情報管理システムの再検討、2. エンド・ユーザ向けのインターフェイスの再検討、3. 管理画面の機能拡張の3点である。

目録情報の管理システムの再検討は、ベータ版で使っていたオープンソースのOmeka (<http://omeka.org/>) に大きな仕様変更があったために必要となった。2017年11月に、従来のOmekaの次世代版という位置づけで組織向けのシステムとして開発されたOmeka S (<https://omeka.org/s/>) が正式に公開されたのである。それにともなって、従来のOmekaは、Omeka Classic (<https://omeka.org/classic/>) と改称される。東京大学文書館デジタル・アーカイブのベータ版で使っているのは後者のOmeka Classicである。Omeka Sは正式公開されてまだ間もないが、周辺の拡張機能の開発などが迅速に進められており、将来性に十分期待できると判断した。東京大学文書館デジタル・アーカイブの本公開版では、このOmeka Sを採用する予定である。これにともない、インターフェイスの日本語化作業を行なっている。

エンド・ユーザ向けのインターフェイスについては、ベータ版では迅速な開発を優先し、WordPress ([\[wordpress.org/\]\(https://wordpress.org/\)\) を使っている。この構成を継続するためには、OmekaとWordPressを連携させるための機能を維持する必要がある、ベータ版公開時にはそれをプラグインとして実装する予定であった。しかし、本公開にあたっては、エンド・ユーザ用のインターフェイスも含め、Omekaで実装するほうが長期的なメンテナンスのために現実的であると考えた。そのため、ベータ版で実装したキーワード検索と階層検索の二種類の検索機能と、画像閲覧機能を提供可能とするべく、Omekaのthemeと呼ばれるインターフェイスを開発することとした。](https://</p></div><div data-bbox=)

最後に、管理側のユーザ・インターフェイスについては、Omeka Sの初期設定と既存のプラグインによる機能拡張では必要な機能を十分に実現できなかった。そのため、管理用の拡張機能をプラグインというかたちで開発している。特に、資料の階層構造を適切に扱うための機能や、国立公文書館のデジタル・アーカイブと連携するための機能など、東京大学文書館のデジタル・アーカイブに不可欠な拡張機能を実装する。

これらの作業の成果は、デジタル・アーカイブの本公開時に反映するだけでなく、GNU一般公衆利用許諾書 (GPL) などオープンなライセンスの下で公開することで、東京大学文書館以外の組織や個人にも活用されることを期待している。

(みやもと たかし)

資料の公開について

(2017年8月1日～2018年1月31日)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト (目録) は、当館のホームページからご確認ください (<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/da/>)。

特定歴史公文書等

平成6年度 科学研究費補助金研究成果
報告書概要 (S0057)

平成6年度分科学研究費補助金の実績報告書
および成果報告書の控え。

歴史資料等

小堀巖関係資料 (F0015)

1968 (昭和43)年～1979 (昭和54)年にかけての東大紛争関係資料。

当時の雑誌、書籍、ピラなど。

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌(抄)

(2017年8月～2018年1月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

8月1日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生2名受入(前半:7月31日～8月4日)(本・柏)	12月4日	名桜大学(1名)、視察のため来館(本)
8月16日	館員臨時打ち合わせ(本)	12月5日	日比谷高校資料館(1名)、視察のため来館(本)
8月17日	樫孝光氏より卒業写真帖受入	12月8日	森本、秋山、全史料協関東部会研究会出席
8月21日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻アーカイブズ実習生2名受入(後半:8月21～25日)(本)	12月13日	東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターより南原繁関係資料受入
8月30日	第34回館員打ち合わせ(柏)	12月14日	森本、文学部鈴木淳教授と打ち合わせ(本)
9月4日	環境整備チームによる書架清掃作業(柏)	12月15日	文書館教員ミーティング(本)
9月5日	小根山、第1回建物管理委員会代理出席(柏)	12月19日	国立歴史民俗博物館から資料返却(柏)
9月11日	森本、南原繁関係資料調査	12月19日	廃棄図書を東大古本募金に寄付(1015冊)
9月12日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」ヒアリング(本)	12月19日	秋山、オーストラリア国立公文書館所蔵日系企業記録受入準備委員会会議出席
9月15日	南原繁関係資料受入(本)	12月20日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」出席(国立公文書館)
9月19日	第35回館員打ち合わせ(本)	12月20日	北海学園大学(1名)、視察のため来館(柏)
9月20日	森本、宮本、国立大学文書館意見交換会出席(学習院大学)	12月22日	収蔵庫防虫のためエヤローチ散布(本)
9月21日	森本、ヒューマニティーズセンターに資料提供関係打ち合わせ(本)	12月25日	高久信一氏より高久近信関係資料受入
9月29日	森本、学術資産等アーカイブズ委員会代理出席	12月26日	森本、秋山、駒場寮同窓会資料調査(亀戸)
	森本、ミニ・シンポジウム「明治日本と東京大学」参加	12月27日	森本、学術資産等アーカイブズ委員会代理出席(本)
10月2日	国立歴史民俗博物館へ資料貸出(柏)	1月5日	第38回館員打ち合わせ(柏)
10月4日	森本、職域限定職員説明会出席	1月5日	文書館教員ミーティング(本)
10月6日	佐藤顧問、森本、150年史WG出席	1月10日	文書移送(本郷から柏へ40箱、柏から本郷へ31箱)
10月13日	法学部藤原帰一教授より法学部教員談話室旧蔵資料受入(本)	1月10日	柏所蔵公文録および東大新聞など150年史編纂WG作業室へ移送
	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」ヒアリング(本)	1月11日	森本、宮本、秋山、東大紛争DB研究会出席
10月16日	法学部図書閲覧係より田部芳関係資料受入(本)	1月12日	宮本、秋山、早稲田大学大学史資料センター訪問
10月17日	除湿機排水、夏期間終了につき停止(柏)	1月15日	環境整備チームによる書架清掃開始(柏)
10月19日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」出席(国立公文書館)	1月15日	森本、宮本、秋山、矢内原科研究研究会出席
10月20日	宮本、柏一般公開業務担当者説明会出席(柏)	1月16日	高橋伸一郎氏より高橋信孝関係資料受入
	宮本、U-Parl 研究会参加(本)	1月18日	森本、宮本、秋山、学務課「学生生活実態調査」関係資料保存の打ち合わせ
10月21日	第16回東京大学ホームカミングデイ出展(本)	1月18日	文書館教員ミーティング(本)
10月24日	宮本、小川、全学ハラスメント防止研修会出席(本)	1月19日	秋山、150年史WG尾崎氏と打ち合わせ(柏)
10月27～28日	柏一般公開2017「柏で探検、知の世界」(柏)	1月19日	秋山、小根山、柏図書館主催サイエンスカフェ「平賀謙文書—デジタルアーカイブを利用した歴史学の研究手法とそれを支える情報技術」出席
10月31日	第36回館員打ち合わせ(柏)	1月23日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー(第1回)(武蔵大学)
11月1日	秋山淳子特任助教着任	1月23日	収蔵庫防虫のためエヤローチ散布およびコンパット設置(本)
11月7日	「蔵出し!文書館」ホームページ公開	1月24日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」ヒアリング(本)
11月9日	森本、全史料協大会出席(相模原)	1月24日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」ヒアリング(本)
11月10日	宮本、茨城県立水戸第一高等学校生徒、収蔵庫見学受入(本)	1月25日	史料編纂所より菊池大麓関係資料受入(本)
	森本、大分県日出町主催シンポジウムにて講演(～11日)	1月26日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー(第2回)(武蔵大学)
11月16日	南原繁関係資料追加受入(本)	1月30日	第39回館員打ち合わせ(本)
	森本、国立公文書館デジタルアーカイブ標準仕様書改定支援業務ヒアリング	1月31日	森本、秋山、文書管理説明会にて説明出席
11月17日	森本、宮本、矢内原科研究研究会出席		
	文書館教員ミーティング(本)		
11月20日	森本、宮本、国立近現代建築資料館情報システム業務ヒアリング(本)		
11月22日	森本、鈴木淳文学部教授と打ち合わせ		
11月24日	佐藤顧問、森本、秋山、150年史WG出席(本)		
11月27日	秋山、北海道立文書館研修会参加(北海道立文書館)		
11月28日	第37回館員打ち合わせ(本)		
11月30日	森本、国立公文書館「アーキビストの職務基準に関する検討会議」ヒアリング(本)		

文 書 館 ト ピ ッ ク ス

ホームカミングデイへの参加：創立から 140 年を振り返る展示

2017年10月21日、第16回ホームカミングデイが催行された。創立から140周年にあたる節目の年ということもあり、企画運営を担当する卒業生課からの誘いを受けて当館も参加することにし、「資料で見る東京大学140年の歴史」と題した展示を行った。常設の展示施設を持たない当館にとっては、こうした機会は所蔵資料を広く紹介するまたとないチャンスである。

展示は安田講堂の4階回廊スペースで行った。密閉式の展示ケースが用意できなかったため、資料は展示台に直置きして直接見てもらった。資料管理のセキュリティ面ではリスクもあったが、そのぶん文書館スタッフが常時待機し、観覧者と交流しながら資料説明ができ、結果的に観覧者には資料を間近に感じてもらえる機会になったのではないかと考えている。

展示資料には、日頃なかなか閲覧提供しづらい絵画やモノ資料、折々の時代をよく反映した資料、そして卒業生が集う催事ということを踏まえて学生生活に関する資料を選んだ。例えば、初代総長渡辺洪基の肖像画、明治天皇の親署と御璽が押された教育勅語や勅語・御真影搬出用の背負子などの大きな資料。あるいは、前身の大学南校時代のドイツ語のテキストや様々な時代の学生の講義筆記ノート、五月祭・駒場祭の資料。現在の本郷キャンパスの建物配置がだいたい完成した昭和11年のキャンパス航空写真。そして、そろそろ事件から50年が経とうとしている、東大紛争時のビラ類。このビラ類が予想以上に関心を集め、熱心に見入る人が多かった。それも必ずしも当時の学生と思われる世代だけではなく、意外と若い世代が多く、むしろ歴史の一コマとなっているからこそ、「これが本物のビラか」という感動があるのかもしれない。

当日はあいにくの氷雨だったが、安田講堂でのメイン企画で加藤陽子教授が大学史に触れる講演をされたこともあり、311人の観覧者を数えることができた。閲覧室では資料は自由に撮影できるというルールを援用し、展示資料も自由に撮影してもらったのは好評だった。展示スペースに対して資料を詰め込み過ぎたこと、また資料についての説明をどう提供するとよいかということについては、今後の課題である。少しずつノウハウを蓄積し、資料が活用される機会、また文書館を知ってもらう機会を、今後も増やしていきたい。

(森本 祥子)

東京大学文書館ニュース 第60号

ISSN 0915-3284

発行日：2018年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

印刷所：松枝印刷株式会社